

2018年 7月 17日

今帰仁村長 喜屋武治樹 殿

## ジュゴン生息海域における不発弾爆破処に対する要望書

今帰仁村民有志 代表 片岡俊也

北限のジュゴン調査チーム・ザン 代表 鈴木雅子

ジュゴンネットワーク沖縄 事務局長 細川太郎

去る2016年8月に発見された今帰仁村ウッパマビーチ沖合の米国製3インチ砲弾11発について、海中での爆破処理が及ぼす沿岸生態系へのダメージが多大なことに鑑み、海中爆破処理を避け、以下の理由から他の方法を検討されることを要望する。

### 1) 天然記念物ジュゴンへの悪影響

絶滅危惧種1A類（環境省）であり国の天然記念物に指定されているジュゴンの沖縄県における地域個体群の存続に関わる。

ジュゴンは日本でも沖縄島周辺海域に極めて少数が生息している。

様々な要因から現在は北部海域を主な餌場として回遊し、2018年より開始された沖縄県のジュゴン保護対策事業報告書においても、同海域がジュゴンの主要な海域とし位置づけられている。

2000年以後古宇利島周辺にて親子のジュゴンが度々目視され、近年では2016年にも今帰仁村ウッパマビーチ沖合や古宇利島周辺において、親子と思われる2頭のジュゴンが目撃されている。（2018沖縄県）現在、沖縄島周辺海域で親子のジュゴンが確認される場所は他になく、繊細なジュゴンが良質な餌と子育てできる静けさという好条件を備えた環境は他に無い。

### 2) サンゴ礁生態系への悪影響

サンゴ礁生態系の中でもイノーの豊かな光合成によって海草藻場は生物多様性を育む。この海草藻場は「海のゆりかご」と呼ばれ、沿岸資源の再生産の場でもある。

近年の沖縄県における沿岸漁獲量の著しい衰退は資源の再生産の場である浅海域の埋め立てや破壊が悪影響を及ぼしていることが指摘されている。（2018年沖縄県水産海洋技術センター）

漁獲高のピーク時の65%もの減少を食い止めるためには稚魚や繁殖の場である沿岸の保全が必須であろう。

### 3) 観光産業への影響

日本で唯一のジュゴン親子がすむ「ジュゴンの故郷」として、今帰仁村が先駆けて「ジュゴン保護」「環境保全」の実例を示すことは、海の豊かさと村民の環境意識の勝る「観光地」としての高い評価につながる。

ジュゴンのすむ海の豊かさは沖縄の自然と暮らしの豊かさの象徴であり、沖縄の将来への大きな希望である。

以上のことから、つぎに要望する。

・ジュゴン保護及び沿岸生態系保全の観点からウップマビーチ沖合の不発弾処理は、海の環境を破壊する海中爆破ではなく、安全な場所への移動（爆破処理しないを含む）別の処理方法を海上自衛隊沖縄基地隊に対して要望して頂きたい。

・地域のことは地域で決める観点から、陸上の不発弾処理とは異なる海中の不発弾処理に詳しい専門家の意見や、ジュゴンが棲み豊かなサンゴ礁が広がる今帰仁村の海について村民と共有し、守るべき村の海の自然環境について広く論議できる学習会の共催をお願いしたい。